

令和8年度 第1回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日 時：令和8年6月1日（月） 18：00～19：30

場 所：川崎市役所南庁舎5階 教育委員会室

出席者：卯月委員、岡田委員、高橋委員、中谷委員、米林委員、宮下委員、宮越委員、五十嵐委員、西委員、鈴木委員、稲葉委員、小泉委員

（事務局）落合教育長、田中教育次長、北川総務部長、山井教育政策室長、竹山教育政策室担当部長、二瓶地域教育推進室長、大村教育環境整備推進室長、宮川職員部長、西田職員部担当部長、細見学校教育部長、植村学校教育部担当部長、神谷健康給食推進室長、加島生涯学習部長、大野総合教育センター所長、山口教育政策室担当課長 他

欠席者：倉持委員、豎月学校教育部担当部長

傍聴者：なし

司 会：山口教育政策室担当課長

[配布資料]

資料1 川崎市教育改革推進会議運営要綱

資料2 川崎市教育改革推進会議委員名簿

資料3 かわさき教育プラン点検・評価シート

資料4 かわさき教育プラン点検・評価シート（別冊）

参考資料 座席表

参考資料 グループ協議タイムテーブル

（18時00分 開会）

議題「かわさき教育プラン令和7年度点検評価について」

<全体共有 1回目>

Bグループ（基本政策Ⅲ・Ⅳ）

小泉委員：Bグループでは、不登校児童生徒への対応が主なテーマとして挙がりました。

いろいろなお子さんがいる中で、例えば、特色ある学校づくりをしているものの、その方向性に合わず自己否定してしまう児童生徒がいるのではないか。一方で、学ぶ意欲があるも

の、いろいろな課題があって、学校ではなく、家庭や地域で学ぼうとしている児童生徒について、教育委員会や川崎市としてどのようにアプローチしているのか、という話がありました。

それだけではなく、例えば医療的ケアや居住地交流など、さまざまな政策で充実してきているところもある中で、今後はどのように取り組んでいくのかという話も出ました。

また、一人ひとりのニーズに対応していくという観点から、GIGA 端末を活用した学びが進められていますが、それは本当に学習意欲の向上につながっているかという意見もあり、学校は教科だけではなく、子ども同士、児童生徒同士での学びが大事なので、そうした学びをどのように保障していくのかということも話題に挙がりました。

夏季の暑さが非常に深刻になっていて、今日も 30°C、6 月頭でこの状況で 7 月は一体どうなってしまうのかと思っています。学校の設備等について、空調の更新や体育館の空調整備が進められていることは感謝の意見がある一方で、現場としては、できるだけ早く、すぐにでも整備してほしいという声がありました。

また、学校ごとに環境の違いが大きいのではないかという話も出ました。既に空調が整備されていて環境が整っている学校もある一方で、非常に暑く、施設の老朽化が進んでいる学校もあるため、そうした学校間の格差についても、計画的に対応していただきたいという声がありました。

A グループ（基本政策 I・II）

西委員：A グループでは、小学校・中学校それぞれで体験活動を多く取り入れ、学年が上がるにつれて、それらをどのようにつなげていくかを工夫しながら、子どもの成長を見守り、自己肯定感や社会的自立につながる教育を実践しているという話がありました。

また、GIGA 端末等を使うことで、学校に通うことができている子についても、学校とつながる役割をしているという意見がありました。

一方、次期学習指導要領について、指導内容、目標設定等が分かりやすくなっていくにつれ、かえって教育活動が AI に取り込まれてしまうのではないかという懸念も示されました。子どもが人間として大切なあり方の軸を作る上では、内側から湧き出る内発的意欲を育てていくことが重要であり、川崎市では国とは異なるものさしで子どもたちを見ていくことも大切ではないかという意見が出ました。また、教員以外の大人とたくさん触れ合うことも重要であり、指標で示されたデータを踏まえながら、教育委員会としてどのような施策につなげていくかという視点で意見をすることが有用ではないか、という意見がありました。

AIについては、「ニューディメンション」という言葉も挙げられ、その有効性が期待される一方で、AIに頼りすぎてしまうことによる課題も生じるのではないかと、この意見がありました。

クリティカルシンキングを育てていくには、一人ひとり丁寧に対応することが重要であり、外国籍の子どもが多いという川崎市の特性を踏まえ、異なる文化的背景を持つ子どもたちと直接触れ合いながら丁寧に見取っていくことも大切ではないかという意見がありました。

さらに、努力が結果に結びつかず自己肯定感が下がってしまうこともあるが、その過程に注目し、頑張りを認め、失敗も丁寧に見取る教育を積み上げていくことで、基本政策Ⅰ・Ⅱがより生きてくるのではないかとこの意見がありました。

最後に、自己有用感が高い子どもが多いことにも触れられ、人と関わりながら活動し、自分が役立っていると感じられることを、今後も学校教育の中で大切にしていけるべきではないかという意見がありました。

<全体共有 2回目>

Bグループ（基本政策Ⅴ・Ⅵ）

鈴木委員：Bグループでは、まず学校教育を評価するという観点から意見がありました。学校だけに限定されない観点ではあるものの、教員の力量という点で、子どもの学習過程に応じた適切なアプローチや、子どもの姿を見取る力が重要であり、そうした力を持つ教員が高く評価されるのではないかとこの話がありました。

また、教材研究の時間を確保することが、結果として働き方改革にもつながるのではないかとこの意見がありました。研修の在り方についても、既存のやり方を踏襲することは必要である一方で、それとは異なる視点や外部の主体と連携しながら変化を生み出していくことが、イノベーションにつながるのではないかとこの意見が出ました。

地域や家庭の教育力を高めるという点では、川崎市には一般の方々が教育に関わる仕組みがあり、教育を自分ごととして考えるきっかけになっている点が非常に良いという意見がありました。地域とつながることの重要性は共通認識としてあり、今後、どのようにつながりを深めていくかが課題として挙がりました。校種によっては、進路や就職を通じて地域や事業者と関わる機会もあるため、こうした取組を今後も継続していくことが望ましいという意見も出ました。

最後に、寺子屋を含めたさまざまな教育資産についても話題となりました。学校が持つ教材等を横展開し、共有していくことは、働き方改革の推進にもつながるのではないかという意見がありました。川崎市にはこれまで積み重ねてきた取組が多くあり、今後さらに発展させていくポテンシャルが大きいという意見でまとまりました。

A グループ（基本政策Ⅶ・Ⅷ）

五十嵐委員：A グループでは、基本政策Ⅶを中心に議論が行われました。

「生き生きと学び、活動するための環境をつくる」という観点から、図書館や市民館の在り方について意見が出ました。特に図書館については、現在の社会状況を踏まえると、必要な情報をリアルタイムで閲覧できる環境整備が今後ますます重要になるのではないかという話がありました。

また、論文を含め、国立国会図書館のようにPDF化された資料が広く閲覧できる時代であることから、川崎市においても、市のデータや図書関連資料等をデジタル化し、多くの人々が閲覧できる環境を整えていくことが望ましいのではないかという意見がありました。

一方で、情報発信の方法については、デジタル化が進む中でも、発信した情報をどのように受け取ってもらうか、受け取りやすい仕組みをどうつくるかが重要であるという話がありました。また、デジタルと紙の双方の利点を踏まえた工夫が必要ではないかという意見が出ました。

図書館については、静かに利用する場であるという前提がある一方で、小さな子ども連れの利用者にとっては利用しづらさにつながる場合もあるため、その固定観念を外し、会話が可能なスペースや、親子・子ども同士で本についてやり取りできる場を設けることも有効ではないかという意見がありました。

そのような場があることで、友達から本を紹介されるなど、自分が知らなかった本と出会う機会にもつながり、利用者にとって心地よい雰囲気生まれるのではないか、生き生きと学び、自ら進んで活動するための場づくりにつながるのではないかという話がありました。

<全体を通した追加意見>

宮下委員：今回の取組の成果を拝見し、横展開や情報共有に多く取り組んでいただいていることに感謝しております。先生方をはじめ、教育に携わる方々がさまざまな情報を得られる場や、そのための機会を設けていただいていることは大変有意義であると感じました。

一方で、情報を得た後に、それを実践につなげるところまで高めていく必要があり、そこに課題を感じました。情報共有の後、実践まで結び付けていくことは非常に難しいとは思いますが、各学校における取組にも関わる点であると考えます。

また、学識経験者の皆様からも、どのようにすれば実践につなげられるのかという点について、今後さらに議論を深めていくことで、情報共有にとどまらず、もう一歩先の取組につなげていけるのではないかと感じました。

(19時30分閉会)